



いちき 長府藩櫟木流砲術保存会

幕末、攘夷戦や下関戦争、幕長戦争などの舞台となった下関。今回は、この歴史舞台で砲術を継承する「長府藩櫟木流砲術保存会」を紹介します。

歴史の舞台で
現代に伝える
砲術

歴史舞台での演武

1863年、長州藩は亀山砲台などから外国船に砲撃を行います。この砲撃をきっかけに、翌年には下関戦争が起こります。

その歴史の舞台となった亀山八幡宮で、長府藩櫟木流砲術保存会の皆さんが銃を構えます。洗練された所作で銃を構え、狙いを定めて発射。澄み切った青空に火縄銃の音が鳴り響くと同時に、観客がどよめきます。砲弾は飛びませんが、あまりの迫力と音に泣き出す子どももいます。

10分ほどの短い時間ですが、迫



力ある洗練された演武に、子どもたちや観光客が見入っていました。

保存会の始まりは20年前

会の始まりは、全国的にも有名な骨董収集家である小川師範が長府藩櫟木流砲術の指南書を入手したことがきっかけで、今から20年前のことになります。もともと博多砲術の経験が20年あった小川師範。秘伝とされている指南書を手にし、「歴史のある櫟木流砲術を復活させたい」と、当時、長府博物館に務めていた大濱会長に相談しました。「これだけの砲術が消えていくのはもったいない。ぜひ残したいと思いましたね」と大濱会長。他にも興味を持つメンバーが集まり、会が発足しました。

流派の特徴は大筒

櫟木流砲術は江戸時代に始まる砲術で、大きな特徴は大筒を使っていること。大筒は主に構築物を





まちかどボイス

6月のテーマ
祝入籍 令和元年の決意



◀大濱会長
「火薬を扱いますので、安全面にはかなり気を配っています。空砲であっても、観客に筒が向かないよう注意していますね」



▶骨董収集歴は約60年。「日本全国を飛び回って、集めています」と笑う小川師範。

破壊する時に使われます。「私の知るかぎり、全国には約180の鉄砲隊があり、大筒だけを使っているのは、櫛木流砲術の他は、九州に2隊ある程度です」と小川師範。筒の大小だけでなく流派により、作法や火薬の調合、構えなどが異なります。

現在、櫛木流砲術で使われている火縄銃は、小川師範が収集した江戸時代の物で、重さは20kgから25kgもあります。「軽々と銃を持っているように見えるかもしれませんが、実際は本当に重いです。年を取ると、体力的にきつくなってきましたね」と笑う大濱会長。メンバーのうち最も若い新田さんも「銃を撃った時の反動もすごいです。長時間持っているとうちが震えます」

編集後記

■特集の取材では、ゴールデンウィーク中にも関わらず多くの関係者の方にお世話になりました。私は、下関出身の作家の本を三冊購入しました。(き)
■皆さんに役立つ情報を分かりやすくお届けしようと、内容とレイアウトを考えましたが、奥が深く迷途に迷い込みました。出口を探求中です。(ひ)
■取材で二十数年ぶりに母校の高校に。変わったような、いないような。白髪交じりの私が一番変わったかも。青い春のあの頃を思い出しました。(わ)

次の世代に伝えたい

櫛木流砲術保存会では、イベント主催者からの依頼などを受け、年間に4、5回演武を披露しています。「これからも、たくさんの人に見ていただきたいですね。そして大砲のごう音を聞いてほしい。下関、長府に伝わる櫛木流砲術をぜひ知ってほしいと思います。次の世代にも伝えていけたらいいですね」と小川師範は話します。

幕末にタイムスリップしたかのような櫛木流砲術の演武。これからも歴史を伝える活動は続きます。